

平成31年度 公立鳥取環境大学
一般入試後期日程 試験問題

小 論 文
(経営学部 90分)

(注意事項)

1. 試験開始の指示があるまで問題を開けてはいけません。
2. 問題冊子は4ページ、解答用紙は2枚です。
3. すべての解答用紙の所定欄に氏名、受験番号を記入しなさい。
4. 解答用紙は横書きです。
5. 試験終了後、問題冊子及び下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章は、スマートフォン（以下スマホ）が私たちの日常の在り方を大きく変容させたと考える筆者による文章である。

本文を読み、問いに答えよ。

確かにスマホは圧倒的に便利な道具です。大学のゼミでは、以前であればメンバー各自の住所や連絡先を聞き、ゼミの連絡網を作っていたのが、今では、メンバーの誰かにお願いすれば、その場でLINEなどSNS（ソーシャルネットワークサービス）を通して「伝えるべき連絡事項や情報」が一瞬のうちに流れていきます。

また私は、最近だんだんものの忘れが進んでいるのですが、ゼミである本を紹介しようと思っても、すぐに正確な著者名やタイトルが思い浮かばない時があります。「ちょっと待ってね、思い出すから」と言い、タイトルを思い出そうと呻吟していると、学生たちはスマホの画面に指を滑らせ、瞬く間に、「先生の言ってる本ってこれのことですか」と正確な情報を示してくれます。このとき、私はスマホ、というかスマホを通して開けているインターネット空間の便利さを実感するのです。

普段私は、パワーポイントなど一切使わずに、従来通り、黒板に板書しながら講義をしています。250人は入るような大教室で講義をしているとき、前の方に座っている学生たちは、板書を適宜自分のノートやルーズリーフに書き写しながら、私の講義を楽しんで聞いています。他方、講義を聞く気もあまりないのに、講義室にやってくる学生たちもいます。彼らは、講義の邪魔にならないよう、それなりに“配慮”（下線部①）しながら、後ろの方にたまって雑談をしています。ただ講義の場にいること自体にまだ意味を見出しているのでしょう。板書である程度黒板に文字が埋まった頃あいを見計らって、一斉に、スマホで黒板の画像を撮るのです。何人かの学生が両手を伸ばして、スマホで黒板を撮ろうとする姿は、前から見ていて、けっこう滑稽で、私は思わず、ピースをして写りこみたいという衝動にかられてしまいます。

余談ですが、私は大学の専門講義は出席など取る必要はないという確固とした思いがあり、講義の冒頭に、なぜ自分は講義で出席をとらないのかを受講生に説明しています。決められた時間割に従って授業を受け単位をとる高校までの教育と大学はまったく違って、自分が出たいから、興味があるから、ある講義を選択し受講登録するはずなのです。だから「出席など取る必要はない」は大学教員としてこれまで生きてきた私の経験から出た思いと言えるでしょう。

<中略>

私の話を聞く気もないのに、講義室の後ろの席をあたため、雑談をしながら、スマホを使って板書の画像を撮る学生には、正直、もう少し大学で自分が何をしたいのか、どのように大学の時間を過ごせばいいのかを考えたらいいのになと、少し残念に思いながら、向けられたスマホに対して、私は思わずピースサインをしそうになっているのです。

余談が長くなりました、話を戻しましょう。

片手に収まる端末としてのスマホ。それは画像や動画も撮れるし、鮮明な映像もみることができし、もちろん電話の機能も備えています。すでにコンピュータの端末以上の機能を持っています。こうした道具を手にしてまさに一日中何らかの形で操作をすることで、私たちは「今、ここ」で、目の前にいるあなたとだけ出会えるのではなく、瞬時のうちに、「今、ここ」を超越し、多様な現実とつながることができます。スマホを使いこなす日常で、私たちはいったい何を手にして、何が脅かされているのでしょうか。それは端的に言って、「世界」を携帯する悦楽であり、その裏返しとして「わたし」が不特定多数の匿名の人々にさらされるリスクだと私は考えています。

コンピュータが開発されインターネット社会が登場してずいぶん時間がたっています。私はノートパソコンでこの原稿を書いています。少し前であれば、デスクトップのパソコンを前にしてキーボードを叩いていたはず。原稿を書いて少しくたびれれば、ワードを閉じて、メールが届いていないか確認したり、ネットを開けてさまざまな情報にアクセスしたりします。ただ、こうした営みは、まさに「机を前にして」私がやっていることなのです。でも今は、「机を前に」する必要もないし、「ノートパソコンを膝の上に置く」必要もなく、ただ手のひらに収まっているスマホに指を滑らせることで、いつでもどこでも「世界」を自分の前に開くことができるのです。

デスクトップからスマホへ。これは単なる道具の技術革新だけではないのです。「机の前に座ったり」「部屋にこもったり」「何インチかの画面に集中したり」など、まさにネットへ私たちが向き合うためだけに一定の手続きや姿勢の変更、意識の変更が必要だったのが、そうした身体的動作や日常的な意識の変更をせずに、いつでも私たちは「世界」と向きあえるようになりました。このことが、日常生きていくうえで決定的な生活の「革新」をもたらしたと考えます。

なにか特別な手続きや意識の変化など一切不要で、いつでもどこでもネット「世界」を開き、自分自身をそこで遊ばせることができるとすれば、これはこのうえもない刺激や興奮をもたらす、えもいえぬ悦楽ではないでしょうか。こう考えてくれば、「歩きスマホ」は必然であり、当然の結果なのです。

日常的な道徳やエチケットとして、あるいは危険な事故を防ぐために「歩きスマホはやめましょう」と連呼することはできても、それだけで絶対「歩きスマホ」はなくなるでしょう。なぜなら、そうした規制の声が耳に入らないくらい、圧倒的に私たちは今、「世界」を携帯できる悦楽に魅了されてしまっているからです。「世界」を携帯できる悦楽に驚き、魅了されているかぎり、「歩きスマホ」は思いっきり自然な営みであり続けるでしょう。

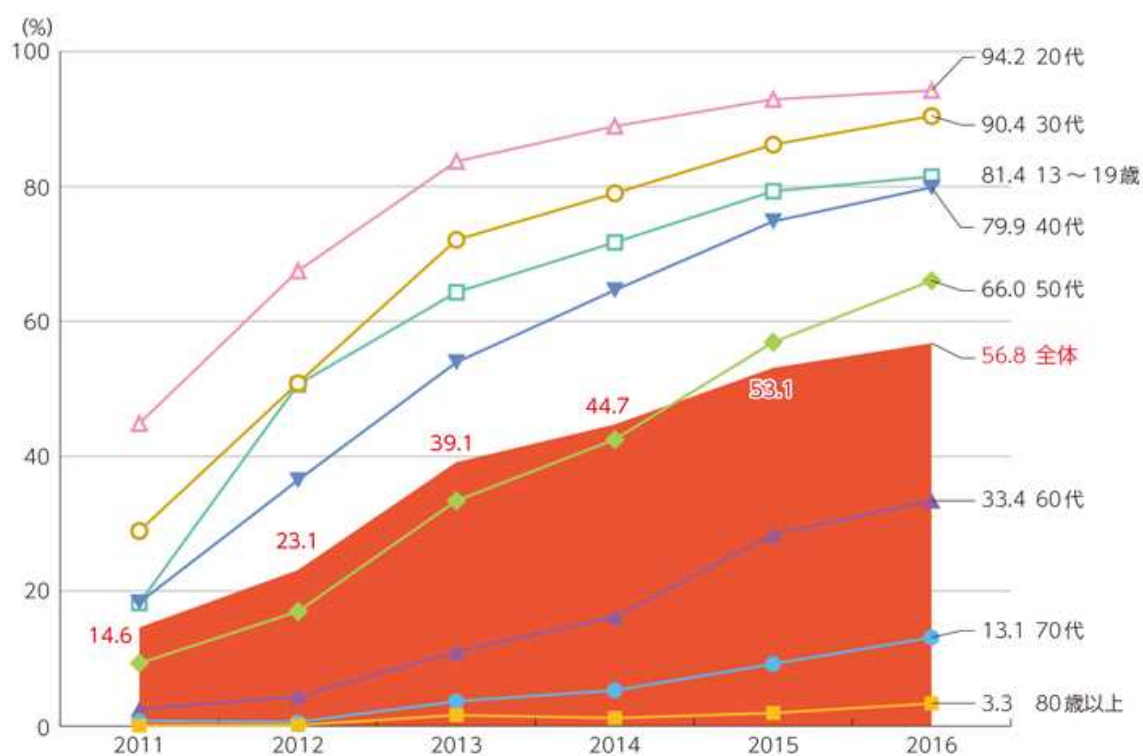
では、どうなれば「歩きスマホ」はなくなっていくのでしょうか。私は、こう夢想します。「世界」を携帯できること自体、特に驚くべきことでもないし、魅了されることでもない、その意味で陳腐で「あたりまえ」という意識を私たちがもつこと。それができて初めて、「歩きスマホ」が日常生活に様々な支障をきたすということ、本当の意味で私たちは自ら

の“腑に落とす”ことができるのではないのでしょうか。

「今、ここ」から考える社会学 好井裕明 筑摩プリマー新書 270 筑摩書房 2017年
(74 ページ-80 ページ)

以下のグラフはスマートフォンの保有率の変化（個人、年齢別）を示したものである。
解答を作成する際参考にせよ。

図表 スマートフォン個人保有率の推移



出典 平成 29 年度版 情報通信白書

(<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/html/nc111110.html>)

問1 今から約10年後の2028年には、スマートフォンはどの程度普及し、その影響で社会はどのように変化しているか。資料を参照して250字～300字以内で答えなさい。

問2 講義を聞く気のない学生は何に対して“配慮”(下線部①)しているのか。またなぜそのような配慮をしようとするのか。120字～150字以内で答えなさい。

問3 筆者は、講義をあまり聞く気のない学生が黒板の板書をスマホで撮ろうとした際にピースサインをして写りこみたくなる、と述べている。その理由について200字～250字以内で答えなさい。

問4 筆者の「歩きスマホ」に対する考えをまとめたうえで、あなたの「歩きスマホ」に対する考えを400字～600字以内で答えなさい。

以上